



地域の底力


勝連

志の高い子供たちを育てる 勝連を訪ねて——「^{きむたか}肝高の^{あまわり}阿麻和利」公演

沖縄県うるま市^{かつれん}勝連

沖縄本島中部の勝連に、550年余りの昔、阿麻和利という名の^{あじ}按司（領主）がいた。彼を主人公として、地元の中高生が演じ、歌い踊る新しい演劇作品「肝高の阿麻和利」は公演回数119回、観客動員者数8万名を数える。文化活動を通じて子供たちの心を育てようという試みは、今多くの大人たちを感動させ、子供のやる気を引き出している。満開の緋寒桜が迎える沖縄で、その公演を観た。

取材・文 千葉 望 写真 荒谷 良一



2000年に世界遺産に登録された勝連城跡。傾斜の急な丘を利用して築かれた城跡を登ると、四方に雄大な眺めが広がる。



ひらた・だいいち●1968年沖縄県八重山郡竹富町小浜島生まれ。和光大学卒業後、小浜島でキビ刈り援農塾、南島詩人農場など地域活性化の活動に注力し、1996年、沖縄県知事より「第1回島おこし奨励賞」を受賞。2000年「現代版組踊 肝高の阿麻和利」、05年「現代版組踊 大航海レキオス」等の脚本・演出を手掛け絶賛される。05年、「教育で地域を、文化で産業をおこす社会起業家」を目指す有限責任中間法人TAO Factoryを設立、代表理事を務める。現在は那覇市芸術監督も兼任。



うるま市勝連庁舎横にある「きむたかホール」。ホールの前には「肝高っ子宣言」の碑とブロンズ像が建っている。

「逆臣」の志に光を 当てる現代版組踊

那覇空港から車で北に一時間半。国道五八号線を走ると、右手に小高い丘が見えてくる。近づくにつれて、大きな石組みの構造物が姿を現す。うるま市勝連南風原にある中世の遺跡「勝連城」である。二〇〇〇年に世界遺産に登録されて以来、勝連城跡周辺も少しずつ整備され、急勾配の石段を登ることさえ厭わなければ、城跡から太平洋を見晴らすことができる。

二〇〇〇年三月、夜の勝連城跡で「現代版組踊 肝高の阿麻和利」という沖縄版ミュージカルの学校に通う中学生一五〇名

である。幽玄な「場」の力にも助けられたか、上演は大成功を収めた。演出と子供たちの指導を担当したのは、竹富町小浜島出身の南島詩人・平田だいいちさん。当時平田さんは三〇歳だった。

「阿麻和利は六〇〇年ほど前、勝連城主だった人物です。琉球王朝の正史では王に反旗を翻した逆賊として扱われ、五五四年間、まったく日の目を見ることはありませんでした。以前の勝連城は整備もされていなくて、野ざらし状態。ちよつと掘り返すと人骨が出てくる怖い場所だと思われていましたね。あまり人も近づかなかったそうです」

支配者から見れば反旗を翻した人間は逆賊であり、悪とされる。日本史にも枚挙にいとまがない「悪」。たとえば平安時代初期、北東北には阿弖流為がいた。蝦夷と呼ばれ、征伐の対象となった。明治維新の混乱の中、賊軍とされてしまった諸藩もあった。だが、見方を変えれば征伐しようとする対象こそ、彼らにとっては「悪」だったといえる。

「阿麻和利は地元の人たちから、長い間顧みられることはなかった。阿麻和利は逆賊。勝連の子供たちはそう教えられて育ってきました」

地元を支配していた按司（領主）は逆賊だった。そう思っていた勝連周辺の人々は今、阿麻和利を「われらの武将」として誇りに思うようになっていく。

変化を起こしたのは舞台「肝高の阿麻和利」である。この作品は沖縄伝統の組踊や音楽を現代風にアレンジし、まったく新しい音楽劇として蘇らせた。逆賊と呼ばれてきた阿麻和利に、「実際の彼は肝高い（志の高い）按司だった」という光を当て、子供たちにも「肝高い生き方」とも言うべき阿麻和利精神文化を考えさせる物語になっている。

子供たちのやる気に 寄り添う大人たち

二月二日に行われた「肝高の阿麻和利」の昼公演を観た。通算一六回目。今回の公演が最後になる高校三年生九名を送り出す、卒業記念公演である。会場となった「きむたかホール」はうるま市勝連庁舎に隣接して建つ、収容人数五一六名の本格的ホールだった。

公演に先立って行われたリハーサルでは、衣装を着けずに通し稽古が行われていた。歌い踊り、芝居をするのは中高生たち。そして、中高生たちだけで構成された「きむたかバンド」が音楽を担当する。キーボードやギターのほか、アンプをつけた三線（琉球の三味線）など沖縄の伝統楽器が使われ、メロデーにもどこか「沖縄らしさ」が感じられる。伝統的な組踊のほか、振り付けを子供たち自身が担当した現代風のダンスが取り入れられている。

指導する平田さんは子供たちの一挙手一投足を見つめながら、

演技やダンスだけでなく、歌や楽器の演奏も子供たちで構成される「肝高バンド」が担当する。沖縄の伝統楽器を取り入れた音楽は、新鮮で力強い。平田さんの指導にも熱がこもってきた。



必要に応じて的確な指示を出していく。
「今までだったら当日までばたばたしていたんですけれども、もうそういうことはありません。」

びっくりするほど子供たちがシステマチックに動く力をつけていますから。いろいろなことを自分たちで決めて、自分たちで動く。子供たちのやる気みたいなものに寄り添って、方向性さえ決めてやれば、ここまで子供ってできるんだなって感心します。それに、彼らは大人以上にきちんと約束を守ります。大人たちがハッとさせられるような行動とか立ち居振る舞い、言動。舞台だけでなく、そういったところにお客様は感動しているようです」

たしかに、平田さんはあれこれ細かいことを言ったりしない。だが、ちょっとした一言にも子供たちの目が注がれ、彼の言葉を自分なりにかみ砕いてすぐに行動に結び付けていく。見事なほどの集中力だ。子供たちは一部の初参加者を含めて、ずっと先輩たちの公演を観、舞台に立ってきた。だから誰も改めて台本を読んだりしない。すっかり暗記しているのである。

本番前の楽屋での表情はまだ子供っぽいが、本番になると、



主演クラスの子だけでなく、脇役や群舞、裏方までが自分の役割をきっちりと自覚して、そのときの最高の力を出そうとしていることが伝わってきた。彼らの表情の豊かさ、目に宿るエネルギーの強さ。心からやりたいと思っていることに打ち込む高揚感がみなぎっている。

小泉純一郎内閣時代の竹中平蔵大臣が公演を何度も観て、そのたびに涙していたというエピソードを思い出した。これは中学校の演劇祭レベルの公演ではない。チケット代金二〇〇〇円とはいえ一九回もの上演回数と八万人以上の動員を誇り、きちんと興行収入を上げてきた、見事な演劇作品である。

文化の力で 子供の心を育てたい

今ではすっかり定着した「肝高の阿麻和利」の仕掛け人となったのが、当時の勝連町教育委員会の教育長だった上江洲安吉さんである。

「僕は教育現場に四〇年間おりました。退職後、『行政の仕事をしていないか』と言われて教育委員会の仕事を一二年間務めたんです。行政に來てみると、私には学校現場から来た関係で校舎やホールなどの仕事も多く降りかかってきました。」

しかし施設や設備なら国に要請して補助金さえ下りれば、行政がちゃんと造ってくれます。



文化の力で子供たちの心を育てようと発想したのは、当時の勝連町教育委員会教育長だった上江洲安吉さん。子供たちは「町の校長先生」と上江洲さんを慕った。

何も教育長がやることはない。ですから町長には『ハードの面は町長が考えてください。僕は子供のソフトの面で、教育を直接やりたいと思います』とお願いしました。

というのは、当時の勝連町（合併前）は一三市町村の中で学力的には本当に下っ端。これではどうにかせんといかんと思いました。この子たちが社会に出ていったときにがっちり和社会を構成する人間になるためには、やっぱりある程度基礎学力をつけたい。その上で、文化的にも豊かな環境を作ってやって、心の問題を少しでも解決したいと思うようになりました」

上江洲さんの言葉を平田さんが補う。

「僕の大雑把な感覚では、かつてこの活動に参加してくれている子供たちの約三分の一は片親家庭だし、三分の一は不登校や引きこもりなどの不適応を抱えているんじゃないかと思っています」

子供たちを取り巻く環境が決してよい状況にないことは日本全国共通。片親家庭が悪いわけではない。だが、沖縄は伝統的に早婚の上、「できちゃった結婚」のち出産してすぐに離婚、という家庭が多いという。また、本土より失業率が高く、世帯収入も低い。その影響は、子供たちの進学率などにはつきりと表れている。

「それから、ここの人たちはもともと自分たちを、隣の与那城町と勝連町を合わせて『よかつちやー（与勝人）』と言って、卑下する気風があったんです。どこかしらうもない奴、と思っっている部分があった。阿麻和利が逆賊だということも影響していたかもしれない」

琉球王朝の城が置かれた首里

公演当日、受付や観客の誘導案内、グッズ販売などバックアップをする「あまわり浪漫の会」メンバーと父母たち。朝から会場設営や準備に忙しく働いた。子供たちの成長を見るのがいちばんの喜びだという。



に対するコンプレックス。車でわずか一時間半のところにあるながら、自分の住む場所を誇りに思えないでいる人々、とりわけ子供たちに力を与えたいと考えたのが、上江洲さんだった。

そこで思いついたのが、子供



たちが演じるミュージカルの上演だった。上江洲さんは自分でも三線を弾く。教員時代は子供に演奏方法を教え、地域を巻き込んだ盆踊り大会を主催してきた。文化を通じて子供たちの心が養われることを、実践を通じ

本番前のヘアメイクを手分けして行う。着付けも先輩たちが後輩を手助け。自然に役割分担ができているという印象だ。



で理解していたのである。

「教育長になって三〜四年目でしたか、琉球大学の泉恵得先生が勝連城跡でオペラを上演なさるのを拝見しました。こういうことが子供たちの手でできたら素晴らしいと思いましたね。なんとか予算をとって、当時の県立博物館館長の大城将保さんと『琉球王国衰亡史』などの著書がある作家の嶋津与志先生に、脚本を書いていただきました」

依頼する際、上江洲さんが条件として挙げたのは三つ。まず、地元の中学生に演じさせること。次に地域の伝統芸能を必ず入れること。それからできるだけ沖縄の方言を取り入れることだった。沖縄方言は無理だという意見もあったが、とにかく教え込むからと納得してもらった。

初練習への参加者は たったの七人だった

問題は指導者だった。難しい年頃の中学生をまとめ、作品として創り上げられる指導者はどこにいるのか。嶋さんが上江洲さんに推薦したのが、「南島詩人」として執筆やパフォーマンスを続けていた平田さんだった。

当時、上江洲さんと一緒に実働部隊として動いていたのが元・勝連町社会教育課長の田原真孝さんである。脚本・嶋津与志さん、演出を平田大一さんと決め、実行委員会が作られた。田原さんが言う。

「子供たちに演劇をさせる事業は初めてですし、作品も新作、ずいぶん当初は戸惑いました。幸い演出家として平田さんが来

てくれたので、彼からアドバイスをもらいながら動きました。子供たちを集めるために各学校へ行き、体育館に集まってもらって事業の内容を説明し、参加を呼びかける。平田さんがトークをし、笛や三線を持ち出してやるということについては子供たちも興味を示してくれたのですが……」

ふたを開けてみれば最初の練習に集まってきたのはたったの七人。これにはさすがの平田さんも驚いた。

「しかも、別々の中学校から集まってくるわけですから、最初から仲良くできるわけじゃない。お互い様子を見合って、壁には

本番直前、平田さんは勝連城跡へ行き、草と小石を取ってきた。草は冠に編まれて、阿麻和利役がかぶるのが慣わし。本番前、舞台上の城のセットに冠と石を置き、阿麻和利の霊に公演の成功と子供たちの無事を祈る。石は公演後、再び勝連城跡に返される。



りついている。髪に剃り込みが入ってる子もいましたよ(笑)。だけど、そこでひるむわけにはいかない。まずは徹底した基礎練習から始めました」

発声練習に始まって、身体を動かす基礎訓練に時間を費やした。平田さんの指導は熱っぽく





主役も脇役も、ダンスチームも、裏方も、全身全霊で自分の役割を果たし、卒業公演は成功のうちに終了した。子供たちの表情は清々しく、美しい。彼らの潜在能力を引き出し、郷土への愛情と誇りを持たせた大人たちの努力も賞賛に値する。



真剣だが、ユーモアにあふれている。最初のうちは及び腰だった子供たちも、はりついて壁から離れ、交じり合って時を過ごすようになった。そのうち「ここにくればなんだか楽しい」と感じた子供の口コミで、参加者が増えていった。

田原さんは、振り返る。

「最初のうちは親や先生に理解をしてもらうのに苦労しました。『勉強はどうするんだ』『部活とどっちが大切なのか』と言われるわけです。そこで最初は教育委員会のメンバーが手分けをして、部活後に行われる週二回の練習のために送り迎えをしたり、軽い食事の支度をお母さんたちにお願ひするなど、苦労しました。この事業は国、県、町から予算をつけてもらっていて、最低三年は続けなくてはいけない。しかし職員の負担が重くて、一年目で音を上げそうになりましたね。そんな様子を見て、父母の皆さんが協力してくださるようになったんです」

現在「肝高の阿麻和利」を企画・運営する「あまわり浪漫の

会」の会長を務める長谷川清博^{せいひろ}さんは、自分の子供たちが活動に参加したことをきっかけに、本格的にバックアップをするようになった。

「二回目の公演から父母会を作りました。子供たちの夕飯は父母の会が担当する。三年目からは送迎も担当しました。今では運営資金づくりのために、チケット販売だけでなくさまざまなグッズを作り、収入を上げています」

長谷川さんは勝連城跡で行われた初めての公演を観た。わが子の舞台ということもあり、涙が出るほど感激したという。平田さんも当時の感激を思い出す。

「観ている大人たちが泣いたり、万歳をしたりしていることが子供たちにも伝わったんです。異様なほどの拍手でしたからね。この拍手をもらった子供たちも泣いて、教育委員会の人たちも泣いて（笑）。終わってみれば、最初は七人しかいなかった子供たちが『これで終わりにしないで』『またやりたい』って言うてきたんです」

弱冠三二歳の 初代館長が誕生

○一年には、きむたかホールがオープンしたが、上江洲さんは町部局や、取り巻く人たちの調整を精力的に続け、平田さんを初代館長に迎えた。子供たちの心を動かせるのは彼しかない、という判断である。とかく、公共施設の館長は天下りということになりがち。慣例を破ったのは上江洲さんの信念だった。弱冠三二歳の館長誕生である。教育委員会や父母たちも、その判断を支えた。

こうして「肝高の阿麻和利」継続上演への体制が整っていった。参加する子供たちが増え、公演の評判も高まっていく。主人公の阿麻和利は現在四代目。普通の学校なら一年ごとに否定なく主人公を務める子供は交代していくものだが、ここでは違う。主人公たるべき子を長い眼で育てていくのだ。徐々に大きな役割へ変わっていく子供もいる。

最近では学芸会に父母が口出し

して、自分の子に少しでも目立つ役をやらせるように強いるケースがあると聞くが、ここではどうなのだろうか。平田さんは、首を横に振った。

「僕は今五つの地域を見ているんですが、都市型の地域の傾向としては親が子供をかまいたがる部分が強い気がします。逆にこのあたりでは、親が忙しくて子供に手をかけられない節があります。前者ですと親の干渉を一切認めず、僕と子供の直接関係を確実に結ぶんです。後者の場合は、親にかまわれない子供の居場所を作っていく、という対応を心掛けます。だから親はとやかく言いません。」

もうひとつ、ここではオーディションをやるんですが、配役を発表する前に、子供に必ず一対一の場でやりたいことを聞きます。第一・第二・第三希望を聞き、ときにはせりふや踊りをやってもらう。希望するならやれるということが前提になります。そのために努力もしてもらいます。下の子はそういう積み重ねを見てきているから、みんなが

みんな、阿麻和利をやりたいとは言いませんね」

舞台を感動させるのは華やかな主役だけではない。それは「肝高の阿麻和利」の公演を観ればすぐわかることだ。子供たちは体験を通じて大きく成長していく。自信をつけ、不登校だった子が学校へ戻った例もある。「卒業」した子供たちが、今度は演技や演奏の指導をするなど、人材も育ってきた。子供たちの手で運営できるようになったのだ。

実践に自信を得て、勝連町では合併直前に「肝高っ子の町宣言」をした。子供たちがすすく育ちやすい町を目指す。子供たちは、自分たちが学んだことを、次の時代にちゃんと伝える役目をする、という志の宣言である。

「今年の秋には、沖縄県人が数多く移民したハワイで公演をする計画です。地元の子供たちとの文化交流もあるんですよ」

上江洲さんが嬉しそうに言った。「肝高い」舞台はハワイでも感動を呼ぶにちがいない。



幕が下りたあとの熱気に満ちたカーテンコール。満員の会場からの拍手が鳴りやまない。子供たちはつめかけた観衆に感謝の言葉を述べ、「自分たちも阿麻和利のように肝高く生きる」と宣言した。